

ないとう じゅんろう
内藤 純朗

警 語

基幹労連・事務局長

「まさかそんな方が隠れていらしたとは気づきませんでした」

これはマスコミのインタビューに答えた人の言葉である。そんな方とは誰か。隠れていらしたのは大阪で姉妹を惨殺した「快樂殺人犯」である。

「これから私どもが申し上げますことをお聞きいただきますようお願いいたします」

これは労働組合の役員が組合員に方針を説明するときの前置きである。もちろん私どもとは組合執行部を指す。

「では会を始める前にお言葉を賜りたいと存じます」

この会とは忘年会であり、お言葉を賜る方は自分の課長である。

いま巷では日本語ブームらしい。本屋に行くときやたらと「な日本語!」「日本語完璧マスター!」などという本が並んでいる。テレビでは漢字・熟語やことわざのクイズ番組が目白押しで、小学生高学年くらいの出題にタレントが大騒ぎをしている。

そもそも日本で日本語ブームと言うのが、何かの間違いではないかと思う。外国での話なら嬉しい限りであるが、これが「わが国で」となるといささか首を傾げたくなる。私は寡聞にして「アメリカで英語ブーム」とか「北京で中国語ブーム」というニュースを聞かない。だとすると「日本で日本語ブーム」と言うのは世界的ニュースなのではないか。

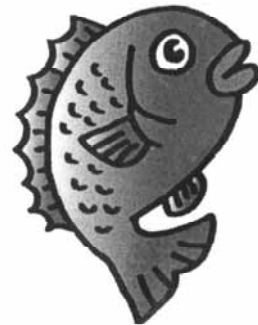
それでは、日本語ブームになる前の日本語はどうであったのか、ということになる。さらにブームとは一過性のものを指す。ブームと呼ばれ、マスコミがもてはやし、それを日本人が淡々と受け止めること自体が「母国語の危機」ではないか。

私は以前から、多くの学識者が指摘する「日本語の乱れ」が気になってならなかった。言語は歴史や伝統を最も伝えやすい媒体である。言葉は文化そのものである。だから「日本語の乱れ」がわが国の伝統や文化を失うことにつながるかという危惧があり、自らの人格・識見を省みず心配したのである。

「乱れ」にはいわゆる若者言葉に代表される日本語の不自然かつ急激な変化がある。カタカナ語の氾濫のように新たな事象に対し適切な日本語で表現できない語学力の低下がある。さらに冒頭に述べた「変な敬語」がある。

日本語は世界でも珍しく「場面に応じた多彩な表現方法」が用意されている。英語なら相手が誰でも、状況がどうでもほとんど似たような表現をする。これに対し日本語は、語尾を変える、物の名称を変える、接頭語をつける、言い方を改めるなど様々な言葉の使い方を変えて、場面に応じた多彩な表現をする。それは日本文化そのものである。

文化であるなら、法隆寺の建築物、豊かな自然、伝統の祭り・芸能と同じように文化として日本語を守っていかなければならないのではないか。私たちはそのことに長く気づかなかった。



それがいま「母国語ブーム」、すなわち言語にとっての危機を迎えたのではないか。

そもそも文化には、揺るぎもしない型に守られて一切の変化を拒んできたものもあるが、緩やかに変化しながら長い間続けられてきたものの方が多い。言葉もそうである。聞くところによると「・・・です」という言い方は、今では丁寧な言い方とされているが、江戸時代の中期には「・・・です」と言うと、なんと下品なものかの言い方をするのか、「・・・でございます」と言いなさいと叱られたそう。なんと「です」は今の若者がよく使う省略語であったわけだ。

しかし、一昔前に流行った「チョベリバ」はどこかに消えてなくなった。もっともこれは日本語とはいえない代物であったから当然の帰結かもしれない。

これは私の想像だが、おそらく昔から若者言葉はたくさん生み出されたに違はなく、現在に残っているものも多いのではないか。「・・・です」もその一つかもしれない。しかし、昔の若者言葉は当時の大人に激しく抵抗され、厳格に審査され、厳しく指導され、それを通過したものだけが現在に残っているのではないか。今の若者言葉はそのような洗礼をほとんど浴びていない。だから「日本語の不自然かつ急激な変化」と指摘したのである。言葉を文化とするなら私たち大人こそそれを守らなければならない。「面白いじゃん」と安易に迎合したり、本質的な誤りを是正してやらない限り、日本語文化は崩れ、さりとて今の若者言葉は100年保て

る文化にならず、チョベリバの運命をたどるのではないか。

なんでもカタカナ表記して「日本語には適切な言葉がない」などと澄ましている学識者も問題だが、実は冒頭に述べた敬語こそ大人の指導を待っているのである。父親と同格の言葉遣いをする子供たちは父親を尊敬していないのではなく、そのような場面に応じた言葉使いを知らないのである。なぜなら親が自分の親に向かってそのような言葉を使わないから。

「・・・になります」「円からいただきます」「・・・でよろしかったでしょうか」

これらのおかしな日本語は、彼らが敬語を使おうと精一杯の努力をした結果なのである。そして大人がそれを黙って認めてきたから氾濫したのである。彼らは私たちに敬語を使おうと努力しているのに、私たちはそれを正しく是正し指導してやろうとして来なかったのである。

若者に言葉を教えるために自らの日本語力を高めなくてはと思う。自信を持って「こんなときにはこう言うのだよ」と教えてやる勇気を持ちたい。今からでは遅すぎると言うことはない。ピンチはチャンスである。日本語ブームというなら私たち大人がこれを一過性にしないで、継続する文化にまで高めてしまおう。

敬語の乱れは、日本文化への「警語」なのかもしれない。あ、オヤジギャグかな、これ...